

は何ををかれても古美術品を蒐められた。先生の蒐められた作品の数は實に夥しいもので、それはひとり、日本、支那の作品を論ぜず、あらゆるものを蒐めてをかれたのである。

一方先生の手によつて國華俱樂部といふものが設けられ、美術學校以外の美術團體として其の興隆、發展について懇談的に盡されたものである。その俱樂部の所有であつた「伊香「保」樓」をあの大地震の前に圍柱會に譲り渡されたが、灰燼に歸する前に他人にゆづつたおかげで、株主にも迷惑をかけずに濟み、基本金を返済した殘金で、口演録を出版するなどの有益な事業をなされたのであつた。

これなども先生の徳の致すところであらうと考へてゐる。ましてあの大地震で焼失してしまつた古美術品の目録を作つてをかけた事は寔に尊い事だと思はれる。

その他先生については色々語りた事は澤山あるのであるが、ともかくも、あらゆる美術方面に深い造詣と鑑識を持たれて、實際の上では、種々なる團體の會長をひき受けられるなど、あらゆるものを、一生を通じて獻身的に指導し、又行はれた事は全く感謝に堪えぬ次第である。

これらは全く先生の徳の然らしむるところであらう。

〔『美之國』第十六卷第四号。昭和十五年四月〕

⑨ 八田辰之助の起用

昭和十五年四月一日、八田辰之助が助教授（鍛金実習担当）として採用された。八田は明治三十八年二月八日香川県に生まれ、同県

立工芸学校金工科を経て本校金工科鍛金部に入學、昭和二年三月卒業して研究生となり、同六年三月に修了した。同八年から富山県立工芸學校教諭の職にあり、金工作家としては昭和六年の聖徳太子奉賛展出品、同八年の第十四回帝展入選（「真鍮線文華瓶」）、同九年第十五回帝展入選（「隴銀電氣スタンド」）などの業績があつた。長く軍籍にあり、昭和十五年現在陸軍歩兵中尉であつた。

⑩ 本校設置記念式

十月四日、本校設置記念式が挙行され、卒業生関係之助、石川巳七雄の講演があつた。

⑪ 『東京美術學校校友會誌』第十九号

昭和十五年十月、校友會は標題の機関誌を皇紀二千六百年、創立五十周年記念号として発行した。編集兼發行人は森田龜之助である。森田は前年の役員改選の際に會報編輯長となり、「公刊文藝雜誌の追隨に墮し、會報本來の意義を喪失せる『東京美術』を極力排斥し何處までも會報としての名實を永久的に存續せしめる」という主張のもとに雜誌を改題し、その体裁を『東京美術學校校友會月報』に近いかたちに戻し、時あたかも創立五十周年とあつて、學校の歴史を振り返つてみようという意図から、関係者の回想等を満載した記念号として編集、発行した。同誌の目次は次のとおりである。

皇紀二千六百年紀元節に賜りたる詔書

口絵